

彼の見つけた夢

私の子どもは、中学生になるとサッカー部に入りました。彼は、プロのサッカー選手になるのが夢と言うものの、そのことにこだわりがあるようにも思えませんでした。また、地道な努力を要することには「だるい」という言葉をよく使い、あまりまじめに取り組もうとしませんでした。私は、わが子の将来をイメージすることができず、不安を感じていました。

彼が中学2年生になり、学校から行く5日間の職場体験が近づいてきました。

「職場体験は、スポーツ店に行けるといいな。サッカーシューズやユニフォームもたくさんあるし。」と、職場体験をとて楽しみにしていました。しかし、実際に行くことになったのは近所の鮮魚店でした。

1日目。希望のスポーツ店に行けず、ちょっとがっかりした表情で出かけた彼でしたが、

「店長の包丁さばき、めっちゃすごい。さすがプロの技や。おまけに、刺身の切れ端を食べさせてもらったら、めっちゃ美味しかった。」

と、無邪気な表情で私に話しかけてきました。

2日目。今日はどんな楽しいことがあるのだろうか笑顔で出かけた彼でしたが、

「今日の仕事は、掃除ばかりやった。だるいし、あまり大事な仕事と思わんと適当にやっていたら、店長に『“雑務”という言葉があるけれど、私は仕事を雑にすることが“雑務”だと思っている。仕事を“雑務”にしてしまうかどうかは自分次第や』って、きつく叱られた。あんなことを言われるために職場体験に行っているのと違う！」

と、ふてくされながら話をしました。私は、店長の話に「なるほど」と思いながらも、我が子に伝える言葉がうまく浮かびませんでした。

3日目。彼の仕事は、この日も掃除ばかりだったそうです。でも、店長にこんな話をされたと言いました。

「この道で私が修行を始めたとき、包丁を3年間握らせてもらえなかった。毎日、食器やまな板、床の掃除ばかりしていた。その頃の自分の仕事には心がこもっていなかった。『そんなことでは心を込めて料理ができないぞ』と、私の親方は伝えたかったのだろうということが、今になって分かった。」

4日目。「仕事に心を込める」ってどういうことかずっと考えていた彼は、丁寧にまな板を拭き、包丁を研ぐ店長の姿にはっとしました。

そして、いよいよ最終日。

「今日は、店長から『魚をさばいてみるか』って言われた。いけすから出したばかりの魚に包丁を入れようとしたけど、怖くてできなかった。そのとき、『この仕事は、命ある魚を料理することだ。どの魚にも精一杯生きてきた命がある。その命をいただくのだから、お客さんにおいしく食べてもらわないと魚に申し訳ない。だから、毎日魂を込めてさばいている』って。店長って、そんなことを考えながら仕事をしてきたのかと思った。」

と、やや興奮気味に話をしました。

今、彼は調理師をめざして専門学校に通っています。中学生のときに鮮魚店の店長に教えられたことがそのきっかけになったそうです。

私は親として、彼の見つけた夢が叶うよう精一杯応援したいと思っています。そして、彼が一人前の調理師になる日を楽しみにしています。